

特集

国際的スポーツ イベントと英語

- 第1部 ラグビーワールドカップ2019™日本大会に向けて ②
- 第2部 さまざまなスポーツイベントにおける取り組み ⑧
- 第3部 スポーツ通訳ボランティアとグローバル人材育成 ⑩
- 第4部 IIBCの取り組み ⑪



英語がもたらした私のターニングポイント ⑫

IIBC TOPICS ⑭



特集

国際的スポーツイベントと英語

国際スポーツ大会の開催は、世界のトッププレーヤーの競技を目の当たりにできる機会だけではなく、スポーツの振興や国際親善に大きく寄与するといわれています。特に2019年のラグビーワールドカップ、そして2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会が控えている今、国際的なスポーツ大会への関心は日に日に高まっています。

このような大会が日本で開催されることにより、外国人の来日も多く見込まれる一方で、それに対応する環境や人材づくりも必要となってきます。

今号では、「国際的スポーツイベントと英語」というテーマのもと、大会の事務局や開催地の取り組み、そして「通訳ボランティアとグローバル人材育成」についての有識者インタビューをご紹介します。

ラグビーワールドカップ2019™日本大会に向けて

第1部

- 公益財団法人 ラグビーワールドカップ2019 組織委員会 事務総長特別補佐 徳増浩司氏インタビュー
- 開催地の取り組み 静岡県袋井市／岩手県金石市

第2部

さまざまなスポーツイベントにおける取り組み

- 第8回神戸マラソン
- 2018FIG トランポリンワールドカップ日本国・前橋大会

第3部

スポーツ通訳ボランティアとグローバル人材育成

- 神田外語大学 朴ジョンヨン氏

第4部

IIBCの取り組み

- 秩父宮みなとラグビーまつり2018

第1部 ラグビーワールドカップ2019™日本大会に向けて

「ラグビーのグローバル化」とラグビーワールドカップが日本にもたらす利点

2019年、アジアで初めてのラグビーワールドカップが日本で開催されることとなりました。英連邦諸国の影響力の強いラグビーコミュニティにおいて、日本への招致の過程ではさまざまな苦労があったといえます。

ラグビーワールドカップ開催までの道のりや、招致活動で感じたことなどを、ラグビーワールドカップ2019組織委員会の徳増浩司氏に伺いました。



ラグビーワールドカップ招致活動で痛感したグローバルコミュニケーション

ラグビーの世界では、伝統国である英連邦諸国の力が圧倒的に強いといわれています。1987年に始まったラグビーワールドカップも、これまではラグビー伝統国でしか開催されてきませんでした。

このような環境の中で、日本は、2003年からアジアでの初めてのラグビーワールドカップの開催地となるべく、招致活動を行ってきました。しかし、初めての招致活動は「氷漬けのドアを開ける」ようなもので、なかなかハードルが高いものでした。

ラグビーワールドカップの開催地は、立候補制となっており、最終的には理事国の投票で決定します。2011年の開催国に立候補していたのは南アフリカ、ニュージーランド、そして日本でした。私たちが各国の代表理事にアプローチするために、名刺交換をし、自分の身分を名乗ってから話を始めるのに対し、ニュージーランドや南アフリカの人たちは、普段からお互いにファーストネームを使い、フランクなコミュニケーションを取っていたことが印象的でした。特にニュージーランドは、代表チームとして人気の高いオールブラックスの遠征試合をほのめかし、相手にとってのメリットを積極的にアピールしていました。ある時、個人的につながりが深かったウェールズの理事と夕食をしながら話をしていたところ、「ウェールズと試合をして100対0で負ける日本にラグビーワールドカップが行くわけがないよ」と言われ、そこで初めて自分たちがどう見られていたのかを知りました。伝統国にネットワークのない日本が国際的なスポーツイベントを招致することの厳しさを痛感させられました。最終的に2011年の開催は、ニュージーランドに決定しました。

しかし、この1回目の招致の失敗は、グローバルなコミュニケーションがいかに大切かということを教えられたいい経験でもありました。当時の国際ラグビー評議会(IRB)会長だったマイク・ミラー氏は、“Cultivate”(耕やす)、つまり用事があるときだけコミュニケーションするのではなく、用事がなくても定期的にコミュニケーションを取って日頃から関係性を構築することの大切さを強調してくれました。名刺交換のような形式にはまったコミュニケーションスタイルだけではなく、フランクに個と個の関係づくりをすることがキーであることをこの時に学びました。

ラグビーワールドカップ開催国

- | | |
|--------------|------------------|
| 第1回 (1987年) | オーストラリア・ニュージーランド |
| 第2回 (1991年) | イングランド |
| 第3回 (1995年) | 南アフリカ |
| 第4回 (1999年) | ウェールズ |
| 第5回 (2003年) | オーストラリア |
| 第6回 (2007年) | フランス |
| 第7回 (2011年) | ニュージーランド |
| 第8回 (2015年) | イングランド |
| 第9回 (2019年) | 日本 |
| 第10回 (2023年) | フランス |



ラグビーのグローバル化が日本開催への後押しに

2007年に始まった次のラグビーワールドカップ開催国の選定は、最終的に2015年と2019年の開催国を同時に決めるという流れになりました。実はラグビーをオリンピックの正式競技にするという動きの中で、国際オリンピック委員会(IOC)から「過去のラグビーワールドカップ開催国を見ると、ラグビーは決して国際的なスポーツとは言えない」という指摘を受けていました。そこで、2015年にイングランドで開催し、2019年はこれまでラグビーワールドカップを開催しなかったアジア地域である日本で開催、というアイデアが出てきました。これは私たちにとって絶好のチャンスでもあり、「ラグビーをグローバルに」をスローガンにして招致活動を続けました。

しかし、そのような流れがあっても一筋縄ではいかないのがラグビーコミュニティです。この時のライバルは南アフリカとイタリアでした。投票前夜まで、立候補国の理事たちが、宿泊しているホテルのラウンジで投票の働きかけを行っていました。私たちがロビー活動を終え、床についたのは午前3時でした。ところが、驚いたのは翌日の朝食の場でも同じ光景がまだ続いており、南アフリカ

とイタリアの理事がアピールを続けていたのです。招致活動とはこれほどまでに厳しいものでした。

最後の投票では16対10で日本が勝ち、2019年の開催地は日本に決定しました。すると、アジア各国のラグビー関係者からひっきりなしに電話やメールで祝辞が届き、携帯電話のバッテリーが早々に切れてしまう始末。「ラグビーをグローバルに」という気持ちは、アジア各国のラグビー関係者にとっても念願だったことを改めて心に刻んだ出来事でした。

ラグビーワールドカップ開催決定の直後に、ニュージーランドの理事から印象的なことを言われました。「南アフリカより日本で開催した方が、ラグビー界全体の将来のためになると考えたから、日本に投票したよ。これから南アフリカに飛行機で向かい、謝りに行く」と。実はニュージーランドと南アフリカは同盟を結ぶ関係だったからです。そのつながりよりも日本開催によるラグビーのグローバル化を優先的に考えてくれたことが嬉しかったです。ラグビーワールドカップ開催地決定の3カ月後には、日本開催が後押しになり、IOCの総会で7人制ラグビーがオリンピックの正式競技に決まりました。

ラグビーワールドカップで生まれる国際交流と新たなコミュニティ

ラグビーワールドカップ2019では、日本国内12の開催都市と、北海道から沖縄までのキャンプ地あわせて全国59の自治体が参加します。つまり海外から選手や観客が日本全国に訪れるのです。海外のラグビーファンは熱狂的な人が多く、ラグビーワールドカップ開催にあたっては長期滞在をする人が多いといわれています。彼らは滞在期間中、観光と試合観戦を繰り返すのです。これは日本人にとって、国際交流の機会を広げるまたとないチャンスと言っていいでしょう。それぞれの自治体が工夫をし、自分たちをアピールできれば、今後の外国人観光客誘致等にもきっとつながってくるでしょう。

また、ラグビーワールドカップを開催することにより、新たなコミュニティも今後生まれてくることでしょう。大切なのは、そのコミュニ

ティをラグビーワールドカップ開催後にどう残していくのか。これは、私たち組織委員会や開催自治体の課題でもと感じています。

日本国内12の開催都市

- | | | |
|------------|------------|-----------|
| ① 札幌市 | ⑦ 愛知県・豊田市 | ⑪ 熊本県・熊本市 |
| ② 岩手県・金沢市 | ⑧ 大阪府・東大阪市 | ⑫ 大分県 |
| ③ 埼玉県・熊谷市 | ⑨ 神戸市 | |
| ④ 東京都 | ⑩ 福岡県・福岡市 | |
| ⑤ 神奈川県・横浜市 | | |
| ⑥ 静岡県 | | |



ラグビーワールドカップに何らかの方法で携わってほしい

先日、ラグビーワールドカップの公式ボランティア募集を締め切りましたが、ありがたいことにたくさんの方が応募してくださいました。担当者によると、応募して下さった方々のうち、ラグビーに関係している方は17%。つまり、大多数の方が、ラグビーとは関係なく、ボランティアに興味を持っていることになります。

ボランティアとは、人の役に立つ喜びが主であると思われがちですが、その場に身を置き、一緒にその時間を共有し、楽しむことに価値があると思います。その意味では、この大会にボランティアとして参加することはまさに「一生に一度」の経験でしょう。

今後、多くの方々にラグビーワールドカップ2019に携わっていただきたいと考えています。大会の観戦やボランティア活動、そしてラグビーワールドカップから生まれる国際交流など、方法はたくさんあるでしょう。そしてラグビーワールドカップ2019で得た経験を、2020年のオリンピック・パラリンピックをはじめとする国際スポーツ大会や、その先へぜひ活かしていただければと思います。



徳増 浩司 氏

公益財団法人 ラグビーワールドカップ2019 組織委員会
事務総長特別補佐

国際基督教大学を卒業後、新聞記者を経て、イギリス・ウェールズのカーディフ教育大学(現:カーディフ・メトロポリタン大学)でラグビーのコーチングを学ぶ。帰国後、茗溪学園高校で英語を教える傍らラグビー部を率い、1989年に全国優勝。1995年から日本ラグビーフットボール協会に勤務し、2003年からラグビーワールドカップの招致活動にあたる。2015年から3年間、アジアラグビー会長を務める。

第1部 ラグビーワールドカップ2019™日本大会に向けて

開催地の取り組み①：静岡県袋井市



ワールドカップを契機に 市全体の国際化を推進



静岡県袋井市に立地し、「エコパ」の愛称で知られる静岡スタジアムは、ラグビーワールドカップ2019の開催地に選定され、予選の4試合が行われます。

袋井市は、ラグビーワールドカップを機に市民と海外の方たちとの交流を深めてもらいたいと、2017年に国際交流室を設置。ワールドカップの際に海外からの観戦客をホームステイで受け入れる「ふくろい版ホームステイ」の推進や、国際交流員による出前英語講座など、さまざまな取り組みを行っています。

市担当者からのメッセージ

袋井市は、2002年のFIFAワールドカップの開催地でもありました。その際は、エコパスタジアムの建設や愛野駅の開業で、ハード面では数多くのレガシーを残すことができました。一方、国際交流をはじめとするソフト面でのレガシーの構築は、十分とは言えなかったという反省点があります。

そうした過去を踏まえ、市長がイニシアティブを取って積極的に進めているのが、ラグビーワールドカップを契機とした袋井市の国際化です。特に外国人選手と市民の交流だけではなく、多く訪れるであろう外国人観光客との交流を含めた街全体の国際化を狙っています。

その一環として2016年から取り組み始めたのが、ホームステイトライアルです。市民の方が自ら外国人を迎え入れることで、草の根レベルの国際交流を進めることができると考えています。

さらに昨年から、市民が英語に親しむことができるよう英会話教室を本格的に始動させました。中学生以上のクラスと親子クラスを開設しているのですが、非常に人気で、ほとんどのクラスが定員を超えています。英会話教室では、日常的な英会話はもちろん、タブレットを使った勉強やスカイプを使った英語コミュニケーションなど工夫を凝らしたレッスンを展開し、英語に親しむ機会を設けています。

ラグビーワールドカップは、袋井市の国際化に向けて大きな一歩であることは間違いなくと思っています。国際交流室の活動も少しずつですが市民に浸透してきました。「ふくろいまるごとインターナショナル」という袋井市の国際交流や英語にまつわる情報を発信する公式サイトをオープンし、国際交流に興味のある市民が登録をできる「ハローフレンド」には、約600世帯の会員がいて、ラグビーワールドカップと一緒に楽しもうと考えている市民が増えていて実感しています。

現在は、袋井市の国際化に向けて種をまいている状態です。ラグビーワールドカップ後もレガシーとして残していけるよう、今後もさまざまな取り組みを進めてまいります。



袋井市 市民生活部
スポーツ推進課
ラグビー開催準備室
主査 辻本 潤 氏



袋井市 企画財政部
企画政策課
国際交流室長
鈴木 浩方 氏

袋井市 国際交流員

袋井市では、2016年から、2名の国際交流員を採用しています。ラグビーワールドカップ開催に向けて、出前英語講座やイベントの企画・運営などを行っているお二人にお話を伺いました。

レイチェル・ミーハンさん 袋井市に来てまず思ったのは、緑豊かでとても美しいということです。ゆったりとした雰囲気この街で国際交流員として活動できることを、とても誇りに感じます。

夏休みには児童クラブで、子供たちを相手に出前英語講座を行いました。英語を使ったゲームなどいろいろなアクティビティをしたのですが、子供たちは英語が話せなくても積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれたのが印象的でした。子供たちが今後も英語と国際交流に興味を持ち続けてくれたら嬉しいです。

来年のラグビーワールドカップ 静岡県で開催される最初の試合は私の母国アイルランド対日本です！ラグビーを生で観戦する臨場感は素晴らしいので、ぜひ多くの方に足を運んでもらいたいです。私たちが本番に向けて、市民の皆さんに国際交流を広めるべく、活動していきます。

サミュエル・ウィーグナーさん 出前英語講座を、消防署の職員の方を対象に行ったことがあります。緊急時に使用する実践的な英会話を教えました。

ラグビーワールドカップに向けて、このような取り組みも需要が高まっていると感じています。

社会人向けの英語教室では、単に英語を教えるだけではなく、母国であるニュージーランドの文化や習慣なども伝えることを意識しています。実際、ニュージーランドのことを話すと非常に興味を持っていただき、「日本ではこうだけど、そちらではどう？」といった反応が返ってくるなど、コミュニケーションの活性化につながっています。またラグビーワールドカップにちなんで、ラグビー

のルールや専門知識を英語で学べるイベントも企画しました。これを機に市民の皆さんがよりラグビーに興味を持ってくれれば嬉しいです。

ラグビーワールドカップでは袋井市に多くの外国人が来ることが予想されます。市民の皆さんがその時に勇気を持って外国人に話しかけることができる、そのような環境の準備を進めていきたいと考えています。



サミュエル・ウィーグナーさん
ニュージーランド・クライストチャーチ出身
2016年8月から国際交流員

レイチェル・ミーハンさん
アイルランド・ダブリン出身
2018年8月から国際交流員

ホームステイトライアル

袋井市では、ラグビーワールドカップを契機に市民が草の根で国際交流を体験できる取り組みを推進しています。「ふくろい版ホームステイ」は、その中でも一大プロジェクト。ラグビーワールドカップの開催時には約100軒のホームステイ受け入れ先を目標とし、2016年からホームステイトライアルを実施しています。今回、2018年8月25～26日にホームステイトライアルに参加した3つのご家族にお話を伺いました。

私たちが今回ホームステイを受け入れた理由は、大学生と高校生の2人の息子に外国人との生活を経験させたいと思ったからです。

アメリカ出身のリーヴァイさんは、18年ぶりの日本でのホームステイだったそうですが、2人の息子たちといろいろな話をしてくださいました。息子たちに感想を聞くと、「違う土地に暮らす人と、1つの言語(英語)で話せることに感動した」「今後も英語の勉強を続け、日常会話が話せるようになりたい」と話していて、短い時間でしたが刺激を受けたようです。私も子供たちがリーヴァイさんと英語で話している姿を見て、学校のテストの点だけでは分からない英語のスピーキング力を見ることができました。ラグビーワールドカップでも私たちにできることがあれば、ぜひ積極的に外国人とコミュニケーションを取っていきたいです。

木村さんご一家



松浦さんご一家



我が家で今回のホームステイトライアルをした理由は、子供たちがいろいろなことを理解できる年齢になったからです。将来は、私たち夫婦と同じように、海外で活躍してほしいという思いがあります。

緊急事態だったのは、英語が堪能な夫が急な海外出張で不在になってしまい、10年以上英語から離れていた私一人で対応をする必要があったことでした。しかし、サウジアラビアからやってきたトルキーさんはとても優しく、親身に子供たちの相手をしてくださり、不安ばかりだった私を安心させてくれました。家ではゲームをしたり、一緒にお風呂に入ったりと、子供たちも終始トルキーさんから離れませんでした。小3の娘は通っている英会話教室の実践ができたようで、緊張をしながらも自己紹介をしていましたし、「大きくなってからも外国の人と関わっていきたい」と話してくれました。この経験を生かして、来年のラグビーワールドカップの際も、ぜひホームステイを受け入れたいと思います。

内山さんご一家



2016年にホームステイトライアルが始まってから、すでに3人の外国人を受け入れてきました。外国に対して壁を感じない子供に育ってもらいたいという思いがあるからです。

3人の子供たちも「ウクライナってどこにあるんだろう?」「こんにちわって何て言うの?」など、リリーさんが来る前から興味津々でした。

今回来てくださったウクライナ人のリリーさんは、普段子供と接する機会が少ないので、不安だと言っていたのですが、子供たちと対面したらすぐに打ち解けてくれました。子供たちが実際にリリーさんと接して驚いたのは、麺類をすすらずに食べること。日本人との習慣の違いを肌で感じ、貴重な体験となったようです。来年のラグビーワールドカップは今からワクワクしています。通訳とまではいかなくても、何か助けになればと思っています。

静岡県小笠山総合運動公園 エコパスタジアム(静岡スタジアム)

エコパスタジアムは2002 FIFAワールドカップの試合会場として建設されました。収容人数は約5万人。ラグビーワールドカップ2019が開催されるスタジアムの中では、横浜の日産スタジアムに次ぐ大きさです。特に芝のメンテナンスには強いこだわりがあり、サッカー関係者からは「エコパの芝は最高!」と高い評価を得るほどです。また、ラグビーワールドカップに向けて、2018年2月には両サイドのスクリーンを国内最大級の縦9.6×横19.2mあるフルハイビジョン対応のものに更新。大きなスタジアムのどこからでも試合状況が把握しやすくなりました。

ラグビーワールドカップに向けて、昨年からスタジアムのスタッフは週1回英会話のレッスンを受けるなど、ソフト・ハード面共に着々と準備を整えています。



第1部 ラグビーワールドカップ2019™日本大会に向けて

開催地の取り組み②:岩手県釜石市



世界中に「ラグビーのまち」 釜石の魅力を発信

いまだ破られないラグビー日本一7連覇を達成し、「北の鉄人」と呼ばれた新日鉄釜石ラグビー部を擁した「ラグビーのまち」岩手県釜石市。2011年の東日本大震災では、津波により甚大な被害を受け、市内でも1000名以上の尊い命が犠牲となりました。

その震災からの復興計画には、当初から「国際的なラグビーの試合が行われるスタジアム」を建設することが盛り込まれていたといいます。震災から8年、復興のシンボルとして行われるラグビーワールドカップを通して、釜石市では、世界に「ラグビーのまち」の魅力を発信するべく、市民の英語啓蒙にさまざまな形で取り組んでいます。

「ラグビーカフェ英会話」レポート

「ラグビーカフェ英会話」は、市民の方がラグビーワールドカップで訪れる海外の方を温かくお迎えし、釜石市と世界との交流の輪を広げられるようにと、ワールドカップ開催が決まった翌年の2016年から始まりました。

現在は、釜石市青葉ビルで、釜石市国際交流員のエミリーさんとアシュリンさんが講師となって、月1回、午前を初級クラス、午後を中級クラスとして英会話教室を行っています。

取材で訪問した6月17日(日)の初級クラスはエミリーさんが担当。「気軽に英会話を始めたい」「外国人との交流に興味がある」方を対象に、テーマに沿ったシンプルな会話や、カードを使ったゲームなど「英語に慣れる」セッションを行っていました。

午後の中級クラスは、アシュリンさんも加わり、すごろく形式で進めたコマに書かれたテーマについてスピーチを行う実践型の会話セッションが進んでいきました。

参加者はそれぞれ10名ほど。会社員の方や、地元でご商売をしている方、主婦、退職されたシニアの方、そして、釜石市に支援派遣で来ている自治体の職員の方といったバラエティに富んだ人たちが参加されていました。初級クラスには、親子の姿も。また、市内だけでなく、近隣の大船渡や山田町、遠野市や花巻市などから参加されている方もいて、英語への関心度の高さがうかがえました。



釜石市 国際交流員

釜石市では、ラグビーワールドカップ2019開催に際して、インバウンド強化を図るために、2名の国際交流員をJETプログラムから採用しています。2人の国際交流員は、英語による市の情報発信、ラグビーカフェ英会話、市の通訳ボランティアリーダー養成講座(釜石市国際交流協会の主催)をはじめとして、商店・飲食店向けの対外国人向け接客指導や英語メニュー作成のサポートまで、幅広い活躍をしています。

実は配属が決まるまで釜石のことは全く知りませんでしたが、こちらに来て、この地の素晴らしさをたくさん知りました。

釜石は小さな街ですので、これまで海外から多くの人々が来るということはありませんでした。そういった意味でラグビーワールドカップは、とてもよい機会だと考えています。「ラグビーカフェ英会話」に参加して下さる皆さんは英語に対するモチベーションが高いので、海外の方が実際に釜石に来たときに使える英語を学んでいただきたいと心掛けています。今後は、ラグビーワールドカップの公式ボランティアとは別に、釜石でもボランティアを募集する予定です。市民の皆さんにはぜひ、完璧な英語でなくても、「英語でコミュニケーションする楽しさ」を知って、たくさんの外国人と交流してもらいたいと思っています。



エミリー・ハラムズさん
総務企画部オープンシティ推進室/
ラグビーワールドカップ2019推進
本部事務局所属
オーストラリア・キャンベラ出身
2016年7月から国際交流員

ラグビーカフェ英会話には、子供からおじいさん、おばあさんまで幅広い年齢層の方が参加してくださいます。皆さんの意欲は高いのですが、普段英語を話す機会がなかなかないので、このラグビーカフェ英会話を有効に活用してくれています。中には、「このような機会を与えてくれてありがとう」と声をかけてくれる方もいて、私たちも嬉しく感じます。

また、ラグビーワールドカップを開催することで、市外から来る人に釜石を好きになってもらうことはもちろんですが、釜石の市民の方にも多くの人との交流を通して改めて釜石の良さを感じていただけると嬉しいです。最近、街中のレストランのメニューの英語版を作成するなど、ラグビーワールドカップへの準備を着々と進めています。市民の方々には私たち国際交流員をいろいろな形で活用していただけたらと思っています。



アシュリン・パリーさん
総務企画部オープンシティ推進室/
ラグビーワールドカップ2019推進
本部事務局所属
アイルランド・コーク州マロー出身
2017年7月から国際交流員



市担当者からのメッセージ

釜石の街は江戸時代末期から操業を開始した製鉄所と共にあり、一時は10万人超の人口を数えましたが、製鉄所の縮小により、今では3万5000人ほどと往時の3分の1となっています。V7を誇った新日鉄釜石ラグビー部も廃部になりましたが、その血と魂を受け継いだ釜石シーウェイブス(日本初の地域共生型クラブチーム)が、今も釜石にラグビーの火をともし続けています。

2011年の東日本大震災では、当地も大きな被害を受けましたが、そこから立ち上がるための釜石市復興まちづくり基本計画を「スクラムかまいし復興プラン」と名付けたのも、「ラグビーのまち」の証しと言えるでしょう。

この復興計画には、2011年7月に作られた計画骨子の段階で「国際的なラグビーの試合ができるスタジアムの建設」を盛り込みました。まさにラグビーがこの街の精神的支えであり、スタジアムは苦難を乗り越えて復活するシンボリック存在なのです。

2015年にワールドカップ開催が決まり、スタジアムの建設とともに、インバウンドへの取り組みも本格的に始まりました。ポ

ランディア通訳の育成や、市内の商店・飲食店への英語対応のサポート、そして2名の国際交流員を採用し、さまざまな活動を支援してもらっています。

もともと港町ということもあり、外の人々との交流が盛んなこの街でしたが、釜石シーウェイブスの外国人選手が増えたこともあり、小さな街ながら、外国人との交流に抵抗感があまりなく、市民の方々も積極的に英語に取り組んでいます。

まだまだ街中にも空き地があり、津波の傷痕も残ってはいますが、ワールドカップ開催が起爆剤となり、復興にもはずみがつくことを期待しています。



釜石市ラグビーワールドカップ2019
推進本部事務局

主幹 増田 久士 氏

釜石鵜住居復興スタジアム

今回のラグビーワールドカップで唯一新設された釜石鵜住居復興スタジアムは、2011年の震災による津波で大きな被害を受けた鵜住居地区に建設されました。

スタジアムが立つこの場所は、約600名の児童・生徒が自分たちの判断で迅速に避難して津波の難を逃れ

「釜石の奇跡」と言われた、鵜住居小学校・釜石東中学校の跡地です。

メインスタンドの一部には2017年5月に発生した釜石市・尾崎半島での大規模林野火災の被害木を使った木製シートや、国立競技場・熊本県・東京ドームから寄贈を受けた「絆シート」と呼ばれているシートが使われています。

ワールドカップではフィジー対ウルグアイなど2試合が行われる予定です。

竣工直前のスタジアムの様子(2018.6.17)



メインスタンドからはこの地から移転した鵜住居小学校・釜石東中学校が見えます。(山の中腹)



メイングラウンドには国内初のハイブリッド芝生(天然芝と人工芝の混植)が採用されています。



メインスタンドから見える大槌湾沿いでは防潮堤や鵜住居川の水門の工事が進んでいます。ワールドカップ開催時までには竣工予定です。

第2部 さまざまなスポーツイベントにおける取り組み

第8回神戸マラソン

「感謝と友情」をテーマに大会を通じて 神戸の魅力を世界に発信

今年で8回目を迎える神戸マラソンは、「感謝と友情」をテーマに毎年2万人が参加する国内でも有数の市民参加型マラソン大会です。現在では約1200人の海外居住のランナーが参加しています。

海外からのランナーをサポートする通訳ボランティアなどの話題を中心に、神戸マラソン実行委員会事務局の渡邊智明氏、萩岡徹氏にお話を伺いました。



神戸マラソン実行委員会事務局
競技運営課 萩岡 徹氏 総務部長 渡邊 智明氏

「感謝と友情」がテーマ

渡邊 神戸マラソンは、1995年の阪神・淡路大震災からの復興と、ここにいたるまで「手を差し伸べていただいた国内外の人々や地域へ感謝の気持ち」を表明する大会として、「感謝と友情」をテーマに2011年11月に始まりました。奇しくも大会準備中の同年3月には東日本大震災が発生したこともあり、国内外のさまざまな被災地に「エール」を送る大会としても位置づけています。

11月18日(日)に開催される第8回大会は、国際陸上競技連盟のロードレースの格付けで「ブロンズラベル」を取得し、また、マラソンに挑戦する人すべてを応援するマラソンチャレンジカップにも参加することで、ランナーにとって魅力ある大会にすべく前進しています。



ボランティアは「コミュニケーター」

萩岡 神戸マラソンには毎年2万人のランナーが参加し、そのうち約1200人が海外居住のランナーになります。この規模の大会を成功させる上ではボランティアの存在が非常に重要です。第8回の今回も約7200人のボランティアに参加いただき、このうち外国語対応を含む通訳ボランティアは120～130名を予定しています。

ボランティアの役割としては、受付・インフォメーション、沿道でのサポートなど。通訳ボランティアの方々には、特に外国語対応が必要

な受付・インフォメーションや救護所などで集中的にサポートをお願いしています。

通訳ボランティアは、語学の目安を設定しており、英語ではTOEIC® Listening & Reading Testのスコア(通訳レベル:700点/日常会話レベル:400点)を一つの基準としています。通訳ボランティアのうち約9割が英語を通訳時の使用言語として挙げています。

渡邊 私たちはボランティアの方々に、お願いしたそれぞれの役割とともに、ランナーと積極的に関わって神戸マラソン、そして神戸という街の魅力を伝えるコミュニケーターとしての役割も期待しています。外国人ランナーにとっては、通訳ボランティアの方の印象が、神戸マラソンそして神戸の街の印象になると言っても過言ではありません。大会では、通訳をするだけでなく、ホスピタリティや熱い思いをもってコミュニケーションを取っていただいているボランティアの方が多く、嬉しく思っています。

大会をささえるボランティアと大会の成功を

萩岡 スポーツ大会は「する」「みる」、そして「ささえる」ものだとされています。「ささえる」を担うボランティアは、「与える」だけだと思われがちですが、「得る」ものも少なくありません。特に通訳ボランティアは海外のランナーとの触れ合いや、通訳ボランティア同士のリレーションシップなど、日常生活ではできない経験をすることが可能です。

渡邊 大会後、ボランティアの方から「ありがとう」と言われる事務局のスタッフも多く、こちらも感謝の気持ちでいっぱいです。この大会はボランティアの方の力なくしては、成功はあり得ません。第8回神戸マラソンもボランティアの方々と一緒によい大会をつくっていきたいと考えています。



神戸マラソン 通訳ボランティアの声

神戸マラソンには、第1回からボランティアとして参加しています。第8回はグループのリーダーとして参加予定です。私たちのグループは、幅広い年齢層で、同大会のボランティアリピーターの方も多く、一緒に活動できることを今から心待ちにしています。

ボランティアを始めたのは、人と話すこと、接することがすごく好きだったから。普段から道で外国人とお会いすると、「Can I help you?」と自分から声をかけに行ったりしていました。

ボランティアをする上で大切にしていることは3つあります。まずは、自分のコンディションをキープしておくこと。健康で元気であることがとても大切だと実感しています。そして、一緒にボランティアをする仲間を大切にすること。いいことをしている方がいたら、その方から

学ぶ姿勢を常に心掛けています。最後に、外国人ランナーと接する際には笑顔を忘れないこと。

ボランティアを通して新しい人に出会い、楽しい時間を共有できることは最大の醍醐味です。また自分が海外に行った時、見知らぬ人にヘルプをしてもらえたらすごく素敵な思い出として心に残ります。日本では私がヘルプをできる人でありたい。ボランティアは、そういった意味でも最適な機会だと考えています。



神戸マラソン
通訳ボランティア
武内 福子さん

第2部 さまざまなスポーツイベントにおける取り組み

群馬県前橋市

市で初の国際大会を成功に導いた 通訳ボランティアの大きな力

日本国内でもトップクラスの設備・施設を持ち、市民の間でもトランポリンが盛んな前橋市で、この夏に「2018 FIG トランポリンワールドカップ日本国・前橋大会」が開催されました。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に伴う事前キャンプ地誘致活動も兼ねた今大会には、19カ国から約200名の選手・関係者が参加しました。

大会運営のサポートに大きく寄与した通訳ボランティアについて、前橋市役所文化スポーツ観光部の萩原伸一氏にお話を伺いました。



前橋市役所
文化スポーツ観光部 スポーツ課
副主幹 萩原 伸一 氏

大勢の観客を魅了した前橋初の世界大会

前橋市はスポーツが盛んな街で、特にトランポリンとサッカーの振興に力を入れています。日本で有数のトランポリン競技設備・施設を有することが評価されて、トランポリンワールドカップの招致に成功し、2018年8月4・5日の2日間「2018 FIG トランポリンワールドカップ日本国・前橋大会」（以下、トランポリンワールドカップ）が開催されました。

同大会は、日本でこれまで大阪と川崎で開催をしており、今回が3回目。19カ国から約200名の選手・役員が参加し、熱戦を繰り広げました。

ワールドカップということもあって予選で約1000人、決勝では約1200人と、事前に予想していた約3倍の観客が来場。市民のトランポリンへの関心の高さを感じました。観客の皆さんは、選手が繰り出す世界トップレベルの華麗な演技を楽しんでいたようです。



トランポリンワールドカップ日本国・前橋大会の様子

予想以上の集まりだった通訳ボランティア

大会には世界中から選手が集まることから、国内でトランポリン競技を統括する日本体操協会のアドバイスもあり、通訳ボランティアを募集することとなりました。

これまで前橋市では国際的なスポーツイベントとして、20年以上前から「国際交流サッカー大会U12前橋市長杯」を開催していましたが、その際は現地から通訳がチームに帯同していますので、今まで市民を対象に通訳ボランティアを募ったことは一度もありませんでした。つまり、スポーツイベントのための通訳ボランティア募集は、初の試みだったわけです。私たちの思いとしては、ボランティアの方々に大会のサポートはもちろんですが、大会を通して、選手や関係者と異文化交流を楽しんでもらいたいという想いもありました。

ボランティアの募集開始は大会の1カ月ほど前でしたが、のべ約500人の方から応募がありました。そのうち60名ほどの方に通訳ボランティアとして大会運営に携わっていただきました。通訳ボランティアは、当初あまり集まらないと思っていましたので、想像以上に応募があり、非常にありがたかったですね。

高校生から60代まで幅広い世代の方に通訳ボランティアとして参加いただく中、ボリュームゾーンとなったのが30代、40代の方たちでした。基本は英語が話せる方が多く、中には中国語が得意な方もいらっしゃいました。普段ビジネスで英語を使用している方や、海外での生活が長い方など語学力に非常に長けている方もいらっしゃいました。ほとんどの方は前橋をはじめとした群馬県在住でしたが、中には隣の栃木県宇都宮市から参加していた方もいました。思った以上に人数が集まったこともあり、選手受付や本部ほか、各国に1人ずつ専任の通訳ボランティアを付けて運営することができました。専任の通訳ボランティアは、選手の会場誘導、食事時のサポートなどに活躍してくれました。

ボランティアの皆さんの高い意識に支えられ

各国の選手からは、「通訳ボランティアがいて助かった」という声をいただき、私たちの思惑は想定通りだったと手応えを感じています。また通訳ボランティアの方からも「楽しかった」という感想が多く聞かれましたし、大会2日前から携わっているボランティアの方は最終日に「もう終わってしまうの？」とおっしゃっていました。大会の評判は非常によく、また前橋でトランポリンワールドカップを開催してほしいという意見もいただいています。

トランポリンワールドカップの成功は、私たちだけでは難しかったと感じています。語学の得意な通訳ボランティアの皆さまにご協力いただき、高い意識をもって海外からの選手、そして関係者と接していただけたことが大会の成功の大きな要因になったと確信しています。

市では今回のトランポリンワールドカップの開催を、東京2020オリンピック・パラリンピックの事前キャンプ地（ホストタウン）の誘致活動の一環として取り組み、すでにハンガリーとは協定を締結、また、トランポリンの強いベラルーシにも今回の大会を通じて、誘致を進めています。

また、自転車などのその他の国際大会誘致にも積極的です。今後も、規模の大きな国際的なスポーツイベントを前橋市で開催する場合は、通訳ボランティアの活用も積極的に考えていきたいです。



参加したボランティアの皆さん

第3部 スポーツ通訳ボランティアとグローバル人材育成

スポーツ通訳ボランティアを通じた
グローバル人材育成

自らの経験を基に、学生のスポーツ通訳ボランティア推進を積極的に取り組んでいる神田外語大学の朴ジョンヨン氏。朴氏にスポーツ通訳ボランティアの語学教育における有用性やグローバル人材の育成についてお話を伺いました。



世界ジュニアバドミントン選手権大会

世界体操競技選手権・東京大会

自らの体験から始まったスポーツ通訳ボランティアの推進

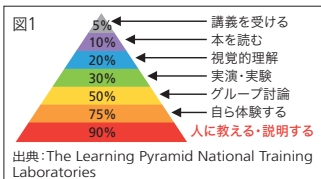
スポーツ通訳ボランティアとの出会いは、日本に留学して2年ほどたった時のことでした。千葉国際駅伝の韓国代表チームの通訳ボランティアに参加したのです。当時は日本語を勉強しながら大学で学んでいたのですが、通訳を通して、「生きた日本語」を学べることを肌で感じました。その後も、さまざまな国際スポーツ大会に通訳ボランティアとして参加し、自分の語学能力を磨いていくと同時に、大会側やアスリートたちとのコミュニケーションを通じて、世界をつなぐ仕事をしたと思うようになりました。

2007年4月に神田外語大学にて働き始めた頃、この通訳ボランティア経験を学生たちに伝えたいと思い、これまでの人脈や経験を活かし、2007年9月1日に「スポーツ通訳ボランティア」のプログラムを導入しました。導入後、すぐに数多くの学生から応募があり、大学生、特に外語大生にとって、通訳ボランティアは、非常に興味の高い分野であることを実感しました。

国際スポーツイベントにおける高い英語のニーズ

2015年に「全国外大連合」に参加する国内7外国語大学の連携プログラムとして、神田外語大学の学長からスポーツ通訳ボランティアを提案しました。これまでの学内での実績が評価されて、「全国外大連合」のプログラムの一つとして通訳ボランティア育成セミナーがスタートすることになったのです。

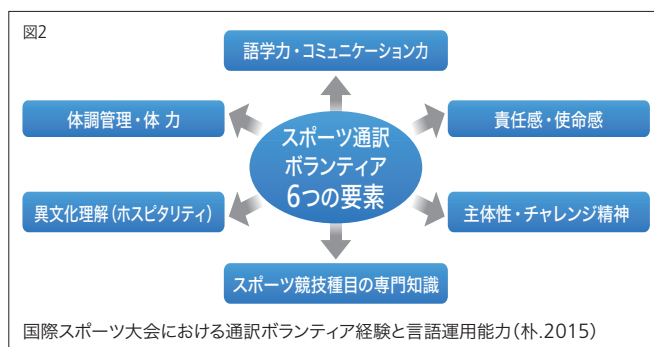
2018年8月に第6回が行われましたが、第5回までに延べで1334名がセミナーを受講し、1261名がスポーツ通訳ボランティアとして登録しています。多くの学生は何かしらの言語を得意としています。約9割の学生が英語を通訳の対象言語として登録しています。また、スポーツイベント主催者側からのボランティアにおける語学ニーズは英語が最も多いということも、いかに英語がスポーツ大会で重要な要素であるかということを示しています。さらに、このプログラムは外国語を学ぶ学生たちの語学・コミュニケーション力の向上はさることながら外国語を学ぶモチベーションアップにおいて、大きな意味を持っていることができます。アメリカのある研究所の調査によれば、講義の受講だけでなく5%に過ぎなかった学習定着率が、学んだことを実践の場で能動的に使うことによって、80～90%まで上昇するという結果が出ています(図1)。スポーツ通訳ボランティアは、まさに実践の場です。普段の授業や生活だけでは体験できない場所や条件の下で、授業で学んだ語学力を実践で試す機会であると同時に、外国語を学ぶ意義や必要性を感じる絶好の機会でもあるのです。



スポーツ通訳ボランティア × グローバル人材

スポーツ通訳ボランティアの経験は、語学力向上のみにメリットがあるわけではありません。

国際スポーツイベントで通訳ボランティアとして責任を持って円滑に業務を遂行する上では、下記図2のようなさまざまな資質が必要とされます。



スポーツ通訳ボランティアの現場には、グローバル人材になりえる要素がたくさん詰まっているともいえます。

第1～5回通訳ボランティア育成セミナー受講者へのアンケートでは、セミナー受講後、グローバル人材とは何か、グローバル人材になるために何をすべきかが明確になったか、という質問に対して、93%を占める参加者が単に通訳ボランティアのスキルや技法を学ぶだけではなく、セミナーを通してグローバルなマインドやグローバル人材になるための資質と条件等について理解を深めることができたと回答しています。

外大連携プログラムでは、2018年の平昌オリンピックに、初の海外への通訳ボランティアとして100名の学生たちを送り出しました。今後学生たちが通訳ボランティアとして活躍できるフィールドは日本だけでなくとどまることはありません。近年ますますスポーツのグローバル化が加速する中、日本の言語教育分野においても、通訳ボランティアは貴重な実践経験の場であると考えます。今後も多くの学生に通訳ボランティアの意義を理解していただき、その効果が日本のグローバル人材育成へとつながっていくことを期待しています。



2018平昌冬季オリンピック大会



朴ジョンヨン氏

●神田外語大学体育・スポーツセンター専任講師
●ボランティアセンター・スポーツ通訳ボランティア推進室長

筑波大学大学院人間総合研究科スポーツ健康システム・マネジメント専攻を修了し、同大学院スポーツ健康システム・マネジメント専攻(博士前期課程)にて非常勤講師の他、上智大学ゲスト講師、早稲田大学委託講師等に就任している。

最近はスポーツ・リベラルアーツ(教養・教育)に関する21世紀の教育について研究活動を行っている。

第4部 IIBCの取り組み

秩父宮みなとラグビーまつり2018

強豪オーストラリアチームとの交流会で
7名の通訳ボランティアが活躍！

オーストラリアの強豪チームを招いて開かれたラグビーの国際親善試合とその交流会。IIBCが公募し選抜した7名のボランティアが通訳業務に挑戦しました。

世界最高峰のラグビーの祭典をいよいよ翌年に控え、6月12～17日、昨年に続きラグビーの聖地「秩父宮ラグビー場」を中心に国際交流試合やイベントが行われました。

今年はオーストラリアからスーパーラグビー※の強豪「ワラターズ」と「ブランビーズ」の2チームを迎え、ジャパンラグビートップリーグ所属の社会人チーム「NECグリーンロケッツ」「サントリーサンゴリアス」と、それぞれワールドクラスのフレンドシップマッチを繰り広げ、大盛況を収めました。

開催にあたり、IIBCは日本人の通訳ボランティアを公募し、派遣しました。主な仕事は、ウェルカムレセプションパーティでの英語による司会、参加チームの監督・VIP選手の通訳、選手と関係者、一般来場者間の通訳サポート、そして試合後のアフターマッチファンクションおよび展示ブース内での通訳。また試合に先立ち、スポーツ庁鈴木大地長官とラグビーワールドカップ2019組織委員会を表敬訪問する選手らに同行して、通訳を担当する等、その活動は多岐にわたりました。

今回の通訳ボランティアの募集はIIBC公式サイトおよびTOEIC SQUARE会員へのメール、そしてSNSにて告知。条件は日本在住のスポーツやラグビーが好きな学生または社会人で、TOEIC L&Rのスコア750点以上にえTOEIC® Speaking Testのスコア140点以上であること。Webエントリーによる1次審査を経て、2次面接を通じた7名がボランティアに参加しました。

メンバーは現役学生ラグーやラグビーファンの学生、スポーツ留学経験者、ワーキングホリデーで英語力を身に付けたという社会人、アメリカの大学を卒業し海外部署との折衝にあたる現役ビジネスマンなどキャリアも環境も多彩な方々となりました。

日本とオーストラリア双方のラグビー関係者と地域・企業の交流を7名のボランティアがお手伝いし、来年の一大イベントに向け大いにムードを盛り上げていました。

※スーパーラグビー：南アフリカ、ニュージーランド、アルゼンチン、オーストラリア、日本の5カ国15のプロラグビーチームによる国際リーグ戦

この活動を通して、感じたことを
7名の社会人・学生ボランティアに聞いてみました。

「通訳は瞬時に自分の判断で進めなければならず、訓練が必要だし学ぶことがたくさんあった。2つの国をつなぐ仕事したいと常々思っていたので、英語が喋れるようになって良かったと実感した」

「好きなスポーツを通じ、得意の英語というツールを使って外国の方とコミュニケーションが取れるのはすごく楽しかった」

「日常で行う英会話よりも丁寧な言葉を心がけた。『よろしくお願いします』など日本語にしかない言い回しを英語で伝えるのが難しい！」

「司会の通訳をする機会などめったにないので、パーティを成功させようと全力で取り組んだ。貴重な体験ができてとても感謝している」

海外で戦うための強さと楽しむための力を 英語で得たことが 日本男子初のメダル獲得につながった

2018年2月に開催された平昌オリンピックにおいて、20歳で日本人メダリスト第1号、そしてモーグル日本男子初のメダリストとなった記憶も新しい、フリースタイルスキー モーグル選手、原大智さん。

15歳からのカナダ留学で学んだ英語とコミュニケーション力が、世界を転戦するワールドカップや、オリンピックの場にどう生かされたのかを語っていただきました。

第8回アジア冬季競技大会(2017/札幌)デュアルモーグル銀メダリスト
平昌オリンピック銅メダリスト
フリースタイルスキーモーグル選手

原 大智さん



金メダリストを目指して、15歳でカナダに単身留学

アウトドア好きな両親に連れられ、3歳ごろから冬になると毎週のように週末にはスキー場を訪れていました。しかし、実はスキーは寒いのと、普通の斜面を滑ることに飽きてしまい、あまり好きではありませんでした。

ところが小学校高学年になり、コブ斜面を滑ってジャンプができるようになると、これが楽しくてたまらなくなりました。12歳の時には競技としてモーグルを本格的に始めました。その時すでに、「オリンピックで金メダルを取る!」という目標ができていました。

中学3年生になり、進路を考え始めました。最初は漠然と高校に進学することを考えていたところ、家族から「モーグルを極めたいのなら、カナダに留学するという選択肢もある」とアドバイスをもらいました。当時はよりモーグルがうまくなりたいという気持ちしかなかったので、英語のことなど考えずにすぐに留学を決断しました。その時、英語力は……、学校の勉強以上のことはやっていなかったですね(笑)。

留学1年ほどで、英語でのコミュニケーションが楽しくなってきた

留学先は国際的なスキーリゾートとして知られる、カナダ・バンクーバー近郊のウィスラーという街でした。ウィスラーはスキーだけでなく、マウンテンバイクなどのスポーツも盛んで、スポーツ留学生のための語学学校もあります。私も現地のスキーチームに参加しながら、最初の1年間は語学学校で英語を学びました。

最初のうちは本当に英語で苦労しました。ホームステイをしていたのですが、英語でのコミュニケーションが怖くて尻込みをしてしまった経験もいくつかありました。例えば洗濯をホストファミリーにお願いできずに、山ほど洗濯物をためてしまったこともありました。また、ご飯を食べにウィスラーの街に出ても、どの店でどのようなものが食べられるかさっぱり分かりません。山奥のリゾートなので、どちらかといえば酒場などの大人向けの店が多く、ラーメンや寿司といった日本食の店もなく、当時15歳の私にとっては入れない店ばかりでとても辛かったことをよく覚えています。

語学学校で1年間学んでいるうちに、だんだん英語に慣れてきたのを実感していました。午前中に学校で文法や単語など英語

の基礎を学び、午後にはスキーチームに参加し仲間たちに覚えたての単語や文法を使って、会話をするようになっていました。知っている言葉を総動員して話していました(笑)。会話の中で分からない単語や言い回しが出てくると、辞書を引いて調べたり、会話の相手に直接質問をしたりすることで、英語の表現を増やしていきました。学校で基礎を学び、人との会話で実践を重ねたという感じですね。

そうやって会話しているうちに、英語のコミュニケーションが楽しくなってきました。こうなると、自分の知りたかったスキーの専門的な話もできるようになり、スキーチームの仲間たちとのやり取りが楽しくなってきました。

語学学校を卒業した後は、地元のハイスクールに入学しました。ハイスクールとはいっても、私のような留学生の割合が多い学校で、特にヨーロッパ系の生徒が多くいました。スキーチームの環境とは違い、生徒は将来の目標や目指していることがさまざまです。共通の話題なども自分から積極的に探していけないと、会話は生まれません。ですので、自分から行動を起こし、コミュニケーションを取っていくことが大切だとハイスクール時代には学びました。

英語が理解できるようになって、競技・挑戦への不安が大きく減った

カナダには4年半住んでいたのですが、その期間はいうなれば「修行」。楽しいこともありましたが、全体を通してみると、海外での暮らしに慣れ、辛さに慣れたということと、英語でのコミュニケーションに困らなくなった、ということが大きな収穫だったと思います。

その経験が最も生きたのはワールドカップです。モーグルのワールドカップは毎シーズン10戦ほどあり、世界を転戦していく



のですが、1カ所に10日前後いても「短いな」と感じるぐらいで、「外国に来た」というように感じることはまったくありません。また、海外の選手たちとのコミュニケーションも不自由を感じません。同じ日本の選手の人たちは、英語を話すことができない人が多く、その点で大変だと思います。

もともと「モーグルがもっとうまくなりたい」という気持ちだけでカナダに行き、モーグルのために英語を習得していきました。自分の中では、当初、英語の上達はどちらかといえばモーグルに必要なことから、という位置づけだったのですが、4年半の経験の中で、英語が理解できることで不安を感じる事がなくなり、より競技に集中できるようになることに気が付きました。

今では一緒に転戦する選手たちとの会話を楽しむ余裕ができるようになりました。気持ち的な余裕もさることながら、リラックスした会話で出てくる相手の「本音」を聞くことができるので、相手のことをよりよく知ることができ、これがまた不安を減らしていきます。

こう考えると、国際的なスポーツにおいて、英語というツールを使える能力というのは、トップを目指すアスリートには欠かすことのできないものではないか、と思うのです。

緊張しながらも楽しんだ平昌オリンピック

2018年の平昌オリンピックは、とても寒かった、というのが一番の印象です(笑)。

自分にとって初めてのオリンピックでしたが、最高の大会だったと感じています。オリンピックという舞台は、どの選手にとっても特別なものであり、普段のワールドカップとは空気感が全然違いました。競う相手はワールドカップと同じ顔ぶれなのに、緊張感しかないのです。いつものワールドカップのように碎けて会話

するということもありません。それどころか、ワールドカップにおいても、オリンピックが近づくにつれ、自然と選手同士のコミュニケーションも減っていきました。これが4年に1回しか行われなない大会の重みなのだろうと感じました。

そのような中でも、自分が目標としてきた舞台で、緊張しながらも楽しむことができました。それが日本男子初の銅メダルといういい結果につながったのだと思います。

モーグルも、コミュニケーションも楽しみながら頂点を目指す

振り返ってみると、自分は「楽しみながらやる」というスタイルを貫くのがいい結果に結びついているということに気付かされます。リラックスした環境の中で、自分の意思をしっかり発信していくことが自分の強みだと感じています。

面白いもので、日本に帰ってきて一番感じたのが「楽」ということでした。海外では自分を発信していかないと何も動かなかったのに、日本では周りの人に恵まれていて、手を差し伸べてくれる方が多いのです。しかし、自分にはどちらが合っているかという、自ら発信して、それを当たり前のように受け入れてくれる海外の方が性に合っている気がしています。



その点で、多くの人に発信ができ、そしてコミュニケーションができる武器である英語を手に入れたこと、これは自分にとって大きな力だと感じています。

これからも、モーグル競技、そして海外選手とのコミュニケーションの両方を楽しみながら、ワールドカップを戦い、2022年に開催される北京オリンピックでは、自分のペースで競技を楽しみながら、最大の目標を達成したいと考えています。

人事・研修担当者セミナー

接客現場における英語対応能力向上のヒント

7月18日、東京にて「接客現場における英語対応能力向上のヒント」をテーマに、人事・研修担当者向けのセミナーが開催されました。インバウンドの増加で、ホテル・旅館や飲食店での接客における英語力が求められる中、接客現場に携わるスタッフの英語力向上、英語学習への意欲をいかに高めるかについての講師講演と、情報交換会が行われました。

英語トレーニング法指導の第一人者、株式会社アイ・イー・シー 千田潤一氏からは、今回のテーマである英語力向上と学習のモチベーションをどう上げていくかについて、セミナー参加者からの悩みにお答えいただきながら、具体的な方策を講演いただきました。

続いて、ヒルトン東京ベイ人事業務部人材育成担当の黒木敬子氏から、実際の接客現場における英語力向上の事例をご講演いただきました。以下、その内容をご紹介します。



セミナーの様子

ヒルトン東京ベイにおける英語教育の取り組み事例



ヒルトン東京ベイは、東京ディズニーリゾート®のオフィシャルホテルであり、海外からのお客様をたくさんお迎えしているため、社員が英語を必要とする機会が非常に多くあります。しかし、スタッフの採用においてはヒルトングループのカンパニービジョン(“To fill the earth with the light and warmth of hospitality.”)に基づき選定をしており、

採用段階で語学力が高いことはあまり重視していません。英語が苦手な人でも、入社後の研修で英語学習をサポートしています。

ヒルトン東京ベイでは、社内の英語力を向上させるために「従業員—管理職—人事」を円をつなげることがポイントであると考えています。



チームメンバーと呼ばれる従業員には、入社時の研修において、カンパニービジョンに基づいて「主体性」(自ら情報を取りにいくこと)と、「ストーリー」(その情報を他者とシェアする仕組み)を徹底的に教え込みます。この「自主性」と「ストーリー」が英語力向上においても効果的に機能すると信じています。

これは、1つの例ですが、あるチームメンバーが外国人のお客様に東京駅までの行き方を問われたのに対して、その彼は英語があまり堪能ではなかったにも関わらず、懸命に日本語交じりの英語とジェスチャーで説明をしました。すると後日、そのお客様から直接名指しでお礼をいただいたのです。その後、お礼を受けた彼は、英語を学ぶ姿勢に積極性が出てきて、自ら進んで英語の得意なチームメンバーに、英語でどう表現すればお客様が喜ぶかを相談していたようです。もちろん彼のこの「ストーリー」は、他のチームメンバーにもポジティブな影響を与えています。このようにヒルトン東京ベイでは、チームメンバー同士がお互いを高め合うという仕組みを大切にしています。この仕組みは、人事が提供する研修だけでは得られない効果があると実感しています。

管理職に対しては、業務に対する従業員の英語研修の重要性を理解、浸透させることを重要視しています。特に「今」ではなく「5年

後のサービス向上」のために研修を行っているということの重要性を理解してもらい、協力態勢を築くことに注力しています。さらに、日々の業務のオペレーションを優先させがちな管理職には、従業員の英語力の向上は、業務にプラスの影響が必ずあるというメッセージの発信に努めています。その結果として、研修やテストなどに参加しやすい文化・雰囲気を作り出すことができているのではないかと感じています。

人事としては、従業員の個性に合わせてさまざまなツールを用意することが重要であると考えています。従業員にも、自分の英語力のレベルを把握したい、英会話をたくさんやってスピーキング力を磨きたい、強制力が働かないと勉強しない、などいろいろなタイプがいます。例えば、レベルを把握しておきたい従業員にはTOEIC Listening & Reading Test(以下、TOEIC L&R)の受験機会を年2回提供していますし、英会話力を求めている従業員には、オンライン英会話の活用を勧めています。私たちは、従業員のニーズを把握するために、常に現場を歩き回ってコミュニケーションを取ることを大切にしています。密なコミュニケーションで、時には従業員に直接TOEIC L&Rの受験を勧めることで英語力向上のモチベーションに努めており、その成果は上がりつつあるのではないかと感じています。

ヒルトングループでは、接客・サービスについてのマニュアルは最低限しかありません。つまり、カンパニービジョンに基づく従業員の主体性に任せているのです。英語についても全く同じことが言えます。

従業員の主体性に加えて、会社として「従業員—管理職—人事」のサークルをうまく回し、英語学習を文化にすることを目指していきます。

ヒルトン東京ベイ(千葉県浦安市)

世界的なホテルグループ、ヒルトンが展開するリゾートホテル。828室の客室と、5つのレストランを有し、東京ディズニーリゾート®のオフィシャルホテルとして、通年を通して国内外から多くのお客様を迎えている。





To the World, with English

英語を活かして、世界で活躍しよう！

IIBCではこの夏、東京・汐留にて“To the World, with English”と題しイベントを開催しました。このイベントは“IIBC AWARD OF EXCELLENCE”を受賞された方やTOEIC® Testsスコアを利用して活躍されている方、また今後英語を使って活躍したいという方をお招きし、それぞれのご経験について共有いただくことを目的としています。



さる7月25日、汐留シティセンター 41階にあるフレンチ・レストラン、Fish Bank TOKYOに、2016年度、2017年度のIIBC AWARD OF EXCELLENCEを受賞された方、四大陸フィギアスケート選手権や秩父宮みなとラグビーまつり2018の通訳ボランティアに参加された方、そしてTOEIC Testsスコア(以下、スコア)を実際の仕事や学習に活かすことに強い関心を持たれている方、あわせて約40名の方々にお集まりいただきました。

“To the World, with English”は、ご自身の英語力を発揮できる場に積極的に関わっていただきたい、というIIBCの想いを形にしたものです。



スペシャルゲストには、ドイツ人と日本人を両親に持ち、ラジオDJ、ナレーターで活躍するサッシャさんをお迎えしました。ラジオDJという夢をかなえるために、母国語ではない英語を一生懸命勉強したサッシャさんのお話に、皆さん共感されているようでした。

各テーブルでは、美味しい料理に舌鼓をうちながら、参加者同士の交流が活発に行われていました。スコアで選抜された四大陸フィギアスケート選手権の通訳ボランティア経験者は、同じくボランティアに参加していた台湾や韓国の方々とは英語を使って大会運営に参加できたことがとてもいい経験だったということを語ってくださいました。また、IIBC AWARD OF EXCELLENCE受賞者の方は、仕事の範囲が広がり、多国籍プロジェクトにも参加できた、ということをお話しされていました。

実際に英語を使って活躍されている方々は、スコアが自分の英語力の裏付けとなり、それが後押しとなってチャレンジの場をつくることができたことと異口同音に語り、これから活躍したいと考えている方々はその話に大きくうなずいていました。

IIBCでは、これからもTOEIC Testsを受験される皆さまがスコアを活かして活躍されることを願っています。

公開テストスケジュール

TOEIC® Listening & Reading Test



回数	試験日	申込期間※1	結果発送予定日
第235回	2018年 11月 18日(日)	2018年 8月 31日(金) ~ 2018年 10月 9日(火)	2018年 12月 18日(火)
第236回	2018年 12月 9日(日)	2018年 10月 12日(金) ~ 2018年 10月 30日(火)	2019年 1月 8日(火)
第237回	2019年 1月 13日(日)	2018年 11月 2日(金) ~ 2018年 12月 11日(火)	2019年 2月 12日(火)
第238回	2019年 3月 10日(日)	2018年 12月 14日(金) ~ 2019年 1月 29日(火)	2019年 4月 9日(火)

TOEIC® Speaking & Writing Tests

TOEIC® Speaking Test



試験日	申込期間※2	結果発送予定日
2018年 11月 4日(日)	2018年 9月 21日(金) ~ 2018年 10月 19日(金)	2018年 12月 3日(月)
2018年 12月 2日(日)	2018年 10月 19日(金) ~ 2018年 11月 16日(金)	2018年 12月 28日(金)
2019年 1月 20日(日)	2018年 11月 16日(金) ~ 2019年 1月 4日(金)	2019年 2月 18日(月)
2019年 2月 17日(日)	2019年 1月 4日(金) ~ 2019年 2月 1日(金)	2019年 3月 15日(金)

TOEIC Bridge® Test



回数	試験日	申込期間※2	結果発送予定日
第69回	2018年 11月 4日(日)	2018年 8月 6日(月) ~ 2018年 10月 4日(木)	2018年 12月 7日(金)
第70回	2019年 3月 17日(日)	2018年 11月 5日(月) ~ 2019年 2月 7日(木)	2019年 4月 19日(金)

*上記は個人でお申し込みいただく際の申込期間です。団体一括試験申込期間(TOEIC Speaking Testを除く)は公式サイトでご確認ください。

また、公開テストスケジュールは変更されることがございますので、最新の情報は公式サイトでご確認ください。

(※1)インターネットでの申込期間です。申込開始および締切時間、コンビニ端末申込については公式サイトでご確認ください。

(※2)インターネットでの申込期間です。申込開始および締切時間は公式サイトでご確認ください。



一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

IIBC 公式サイト <http://www.iibc-global.org>

【お問い合わせ】

東京 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-5521-5901
名古屋事業所 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル Tel. 052-220-0282
大阪事業所 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル Tel. 06-6258-0222

【報道関係お問い合わせ】

広報室 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-3581-4761